



Title	この頃の国際学会
Author(s)	古江, 尚
Citation	癌と人. 1997, 24, p. 12-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23879
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

この頃の国際学会

古江 尚*

私が初めて海外に渡航したのは、昭和37年のことである。丁度、モスクワで第8回国際癌学会が開かれることになっており、学会で世界各国から若い医学者30人位を招いてくれたのである。日本からは私を含めて3人が選ばれた。当時の日本では正当な用務以外には海外に出ることはかなわなかった。

学会から送られて来た航空券は羽田から最短距離のタシケント経由のものだったし、確かに当時はスカンジナビア航空がタシケント経由で東南アジアに飛行機を飛ばしていた。当時のヨーロッパ・エコノミーの航空運賃は往復で46万と、今とあまり変わらない。それがタシケント経由だと、3万円ぐらい安かった。しかし1人旅は心もとない。アメリカン・エクスプレスに頼んで、コペンハーゲン経由に変えて貰った。当時日本航空はすでにDC-8を飛ばしていた。もちろんアンカレッジ経由である。そしてファースト・クラスには何人か乗っていたようだが、エコノミーの方はわれわれ一行の10名だけで、他には誰も乗っていなかった。横になって寝転んで行った。

東京を夜に発って、翌朝9時すぎにコペンハーゲンに着く。このコペンハーゲンに着地したときの感激こそ、私の生涯の中で唯一、最大のものである。丁度7月の頃で、青い麦穂にかこまれた瀟洒な人々が並んでいた。チボリ公園、市庁舎、運河、お城。異邦人の私には目新しく映っただけではない。大きなカルチャー・ショックを受けた。今のように情報が氾濫している時代では得られない感慨である。

さて、当時のソ連はまさに“良き時代”を象徴するものであった。4年に1回開かれるこの学会にすでに世界各国からは数千人もの人が参加していたし、学会場はもちろん、ホテル、シャトルバス、エクスカーションなどもよく組織され、運営されていた。政府主催のパーティでは大変な御馳走が並び、オペラやバレーが披露され、ミコヤン副首相が盛んに愛嬌をふりまいていた。当時の為替レートは1ルーブル400円(1ドルは360円の固定相場)、今は20銭ぐらいなのだろうか。

この学会に参加した日本人は僅か30名で、他国に大きく出遅れていた。われわれ3人と、田崎勇三先生、吉田富三先生、黒川利雄先生、山村雄一先生、北大病理の武田勝男先生などである。お偉い先生方はモスクワ・ホテルが宛がわれていたけれども、われわれはウクライナ・ホテルだった。もっともこれも大ホテルではある。しかし食堂の味、サービスの悪さに、われわれはしばしばタクシーを飛ばして、武田先生に北京ホテルの中国料理を食べに連れていっていただいた。いつも混んでいたけれども、われわれ外国人には優先してテーブルが与えられた。当時のモスクワは真夜中でも治安は十二分に保たれていた。

学会が終ってから、私は当時、佐々木研究所におられた、同じく招待組の井坂先生と2人して汽車でレニングラード(当時)を経由してヘルシンキに出た。寝台車は豪華だったけれども、路線はひどかった。国境の警備は厳重を極めていた。われわれはそれから2人してヨーロッパ

* 大阪癌研究会一般学術研究助成選考委員、帝京大学医学部教授

各地の研究所を訪ねてまわった。政府からは1日35ドルの外貨の割当てを受けていたので、贅沢をしなければそれで十分だった。1カ月かけて訪ね歩いたけれども、この間に出会った日本人は僅かに2人だけだった。目が合うと、必ずお互に近よって、挨拶を交した。

さて、こうして書いているのは、決して“古き、良き時代”を懐しむためではない。この30年の間にすっかり変ってしまった国際学会事情と、そのことの意味を、よい点も悪い点も含めてよく考えてみたいからである。

今でも国際癌学会は4年に1回、世界各地で開かれる。世界中から7,000人が集まる。今ではわが国からも当時の30倍の1,000人が参加する。それに伴って、それに近い数の製薬会社関係の人が同行するといわれている。だから日本人の参加なしでの学会の運営は考えられない。

学会場ではこの頃の若い人は、英語での発表を原稿なしで喋る。しかも発表に続く討議もまた流暢にこなしていく。まったく驚きだ。私などは、いや私だけではない。私のまわりの多くの人が、国際会議の発表に当っては繰り返し練習し、予測される質問に対する準備までして出掛けたのと大違いである。外国語で話をする場合には、思考過程がその国の言葉になっていなければいけないといわれているが、若い人はその辺の頭の切り替えがスムースなのだろうか。

それに、この頃は日本人の書いた学術論文を英文誌の、しかも一流誌にしばしば見かけるようになった。例えばアメリカの最も代表的な癌の臨床関係の雑誌“Cancer”に日本人の書いた論文が載るのは、以前は年間を通じてせいぜい1～2編にすぎなかった。それが今では、号数が増えていることもあるだろうが、年間100編に近いのではないだろうか。探してみても和文では見かけない論文もある。

私はここ何年か、大阪癌研究会の催す、研究助成金公募の審査をやらしていただいている。この助成金の応募に当っては、最後に御本人の

業績目録を出していただくことになっている。そしてここでもこの3～4年の間に英文誌が業績の大勢を占めるようになっている。私は他にもこのような審査委員をいくつか務めているが、その中にあって、大阪癌研究会の応募は一般に格調が高い。それにしてもこれもまた驚きである。それに残念ながら日本語の国際性は今なお、非常に低い。若い人がどんどんと国際舞台に出て行って、英語で発表し、英語で討議し、論文を英文誌、特に歴史をもったジャーナルに掲載するのは大変良いことだし、大事なこともある。私も外国語の習得には私なりに努力して来た。高等学校時代、戦時下にもかかわらず、時間割の半分近くが外国語だったし、外国人の教師もいた。戦後は外国人の個人レッスンも受けた。しかし今でも日本語の思考体系から抜け出せないでいる。いや、私の英語には鹿児島弁の訛りがあるともいう。この歳になって、若い時に勉強しなかったことをつくづく悔いでいる。せめて英語だけでもものにしていたらと、反省しきりである。

それでも、今の若い人は恵まれているというべきであろう。国際学会にも行きたいときに行ける。夜、日本食レストランや高級レストランに行くと、日本からの出席者で賑わっている。昔の一人旅は淋しかった。まわりは外国人だけで、日本人は誰もいない。特に夜の食事がそうだった。注文してから食事が来るまでの所在無さ。もうひとつ、食事がすんでから寝るまでの淋しさ。思わず涙したこともあったし、女房が一入恋しく思われたのもこの時のことである。

今回も、二月初め、第7回対癌治療国際会議に招かれてパリを訪れた。「冬のパリはグルメの季節だし、それにオフ・シーズンだから、飛行機もホテルもがらがらだろう」。「だから、日本航空の1日2便あるフライトのひとつがキャンセルになっているではないか」。日通旅行の、いつもお願いしているKさんもコンピューターを見ながら、がらがらですねという。だから飛

行機の中でゆっくり本が読めると楽しみにして行ったところ、とんでもない、満席ではないか。聞くと、エコノミーの席があふれたのだそうである。それにこの時期は、卒業を控えて、特に女子学生が大勢して海外に出掛けるのだそうだ。そして、よく知られているように、一般にこういう人達は学校の嬌がよくない。M先生などもこうして隣に座った若い日本人女性がパリに着くまで只酒を飲み続けていたそうである。

「貧すれば（日本航空はここ1～2年無配）貧する。」というけれども、担当の人達はこのような仕打ちが、ノーマルの航空券で乗った客にどんなに非礼なことか、多少とも理解しているのだろうか。だから、帰りはエル・フランスにして、1人して横になって来た。それに欧州の航空会社の便は現地を昼すぎの比較的早い時間に離陸して、現地で真夜中になる頃にはもう成田に着いているので、体も楽というのだ。

それにしても、この厳冬のパリ市内も日本の若い女性であふれていた。30年ぶりにエッフェル塔にのぼる積りでいたが、やはり叶わなかつた。行列までして上る気もしない。

ホテルは学会で用意してくれた。ホテル・コニカルド・ラ・ファイエットである。このホテルは中心部からは少しそれぞれけれども、国際会議場や地下鉄の駅と建物が続いているので便利である。近代的なマンモスホテルではあるけれども、やはり高級ホテルで、室料も高い。そして、ここもまた日本からの若い男女であふれていた。その480人がチェック・アウトしたと思ったら、今度は大阪の方らしい大学生の一団がチェック・インして来た。中に髪を茶色に染めた男子学生も混じっていた。パブリック・スペースで大声を出し、食堂ではタバコの煙を天井にむけて吹きつけていた。

こうして、約10年か20年前から国際会議を取りまく環境がすっかり変ってしまった。大変便利になったし、進んだといってよい。ただしかし、私が生まれて初めてヨーロッパの土をふんで感じた、あのような感激を味わうことはもう無くなってしまっているのではないだろうか。あまり変わらないのは航空運賃だけのようである。

